

尾張・美濃の平安期施釉陶器生産をめぐる2、3の問題

高橋 照彦

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

尾張・美濃の平安期施釉陶器生産をめぐる2、3の問題

高橋照彦

1. はじめに

尾張国東部の猿投窯や美濃国東部の東濃窯などが分布する東海地域は、平安時代において灰釉陶器や緑釉陶器といった施釉陶器生産の一大中心地であった。それらにかかわる諸研究は、編年指標をはじめとして、この時期の考古学で重要な位置を占めてきた。

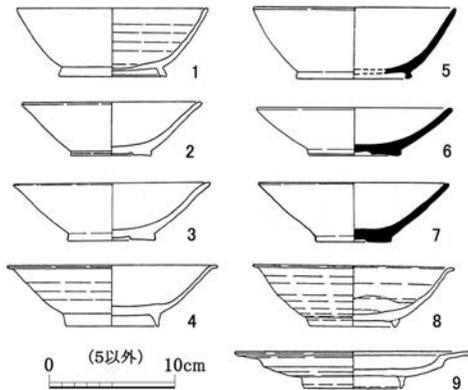
研究史上でとりわけ著名なのは、猿投窯の編年観をめぐる実年代論争であるが^(注1)、その点はずでにはほぼ見解の収束をみている。近年では『愛知県史』^(注2)や『新修名古屋市史』^(注3)などの自治体史の刊行により、調査・研究の現状にも見通しがかなり良くなった。そこでは、検討の必要があった課題にも一定の見解が示されている。例えば、本格的な灰釉陶器生産の開始直前に設定されていた井ヶ谷(I G)78号窯式期(以下では「窯式」を主に用いる)は、その前の折戸(O)10号窯式や後の黒笹(K)14号窯式と年代的に併行するものとして窯式から省かれた。井ヶ谷78号窯式期の存否は、すでに問題視されていたものの、既往の編年を組み直す方向が固まったことを示している。

ただ、いまだ見解の相違も残されており、以下ではそのいくつかを取り上げてみたい。

2. 施釉陶器生産にかかわる諸問題

まず、「白瓷(しらし)」や「瓷器(しき)」という用語の問題に触れておく。灰釉陶器という用語では時代を限定できないため、平安時代の灰釉陶器に対して文献史料にみえる「白瓷」を当てる提唱があり^(注4)、その主張が『愛知県史』に引き継がれている。ただし、平安時代の史料にみえる「白瓷」には中国の白磁も含まれており、灰釉陶器を指すとは限らない^(注5)。歴史用語を現在の考古資料に当てる際には、厳密にはかなり注意が必要である。瓷器・青瓷も同様ながら、多様な内容を含む歴史用語は避けたほうが望ましいと考える。

念のため付記すると、「須恵器」も白瓷と同様の疑念を生むかもしれないが、須恵器は古代では一般に「陶(器)」と記される。「陶器」は現代まで続く用語として指示内容も変容し、混乱をきたすことから避けるのが良い。一方で、「須恵器」は当時の一般的な用語ではなく、いわば考古学的な造語とも言えるものであり、指示内容にほとんど錯綜もない。歴史的な用語の採用には相応の選別が必要であろう。



第1図 黒笹7号窯出土遺物とその比較資料

1・2・4：黒笹7号窯出土須恵器(?)、3：黒笹14号窯出土灰釉陶器、5：興福寺一乗院宸殿下土壙出土緑釉陶器、6：長岡京跡右京第246次SK24602出土青磁、7：平安京右京三条三坊三町SX07出土青磁 8・9：黒笹5号窯出土灰釉陶器（縮尺：5のみ1/7、それ以外1/6）

次に、具体的な実態に話を移すと、『愛知県史』では折戸10号窯式期が細分されて、後半の小期として黒笹7号窯式を置いて灰釉陶器の萌芽の生産をみる考えが示されている(第1図)。確かに、黒笹7号窯には有台碗に金属器あるいは中国陶磁を模したものがあり、黒笹7号窯は黒笹14号窯などに地理的に近接する特筆する区域(米ヶ廻間)に所在し、灰釉陶器生産の初現的な活動があったとしても不思議はない。ただ、対象資料が2点(第1図-2・4)とされることには慎重な評価も必要である。特殊品の存否は偶発的

であるため編年指標にふさわしくなく、^(注6)一般論ながらも隣接窯からの混入の可能性も免れない。

個別的にみても、越磁模倣形の碗(第1図-2、筆者分類^(注7)の碗C)は黒笹14号窯出土品(同-3)と形態的に酷似する。一方で、その形状は長岡京期出土品^(注8)にみえる器高の低い古い形状の越磁(同-6)を模倣するものではなく、平安期に一般的な越磁碗の形状である(同-7)。しかも、黒笹14号窯には7号窯に比べて高台幅が広く、より古相の碗も認められる。黒笹7号窯のもう一つの碗(同-4)についても、口縁部が大きく外反するものは黒笹14号窯式に一般的である。『愛知県史』では自然釉とみなされているようだが、白く焼き上がり灰釉が認められる点でも黒笹14号窯式との相違は少ない。三角形をなす高台は、確かに特殊ではあるが、黒笹5号窯のように黒笹14号窯式から90号窯式への移行期にも存在することは知られている(同-8・9)。

黒笹7号窯出土の当該2資料は、混入でないとしても、少なくとも報告書にもあるように廃窯直前の様相とみなすべきであろう。編年区分では黒笹14号窯式に重なるもので、灰釉陶器生産の画期は黒笹14号窯式期に当てるのが穏当である。ただし、黒笹7号窯を含む折戸10号窯式の須恵器(第1図-1)には長岡京期頃の緑釉陶器にみられる形状の碗(同-5、筆者分類の碗X)^(注9)が含まれ、生産内容の新たな胎動があったことは認められる。^(注10)

3. 10世紀における碗類の器形細分とその変遷観

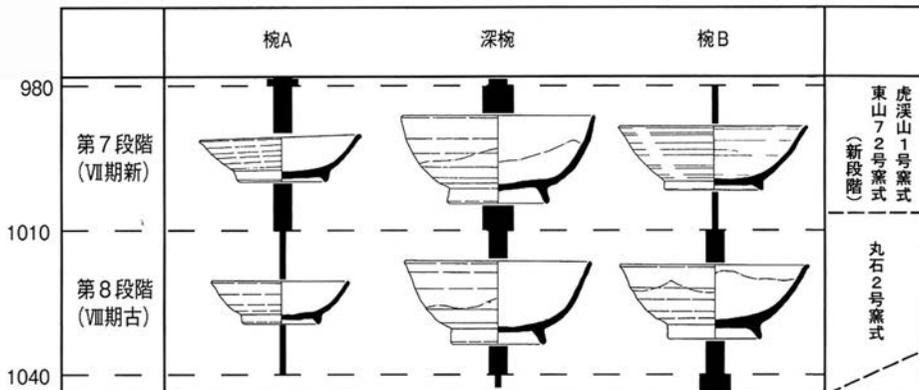
灰釉陶器の成立期の問題に触れたが、その後の時期でも課題が残る。ただ、本稿では紙

数の制約もあるので、以下では灰釉陶器生産の後半期ともいえる10世紀に焦点を当て、とりわけ椀皿類の分類やその変遷のもとともなる器形の由来に関して議論したい。

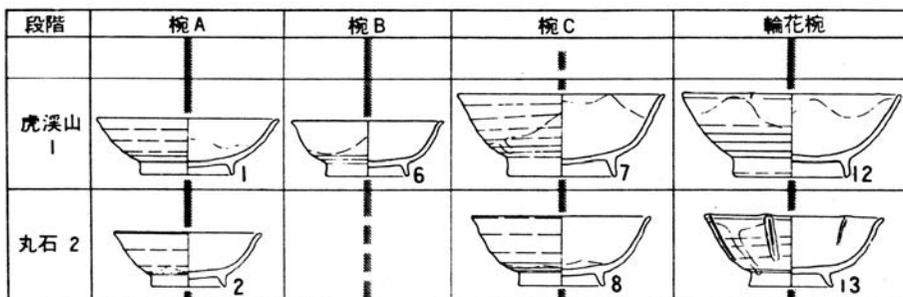
『愛知県史』では窯出土品の主体を占める椀皿類についての細かな器形分類は必ずしも明示されていないが、10世紀にいくつかの器種が併存するという認識は定説化している。研究史としては藤澤良祐氏がいわゆる山茶碗の祖型になる新たな椀の出現を想定し、その後には楯崎彰一、前川要、齊藤孝正、尾野善裕などの各氏もそれを踏襲している^(註11)。

前川氏以来ほぼ定着している変遷観を簡潔に言えば、9世紀以来の椀Aが継続するとともに、10世紀前半の折戸53号窯式に深椀が出現し、10世紀後半の東山(H)72号窯式には山茶碗に連なる椀B(「前川椀B」と仮称)が出現するという流れである。尾野氏は、東山72号窯式で深椀が主体を占め、その後は椀Bが残るといった消長を復元する(第2図)。

これとはやや異なる分類案として、東濃窯を対象とする若尾正成氏によるものがある(第3図)。9世紀の光ヶ丘1号窯式(黒笹90号窯式併行)以来の椀Aのほか、体部下半が張るものの器高が高くない椀B(「前川椀B」とは異なる形状で、「若尾椀B」とする)が大原2号窯式(折戸53号窯式併行)に出現し、器高が高い東濃で深椀と呼んできた椀Cがさらに



第2図 尾野善裕氏による編年図 (一部抽出の上、作図。実測図縮尺：1/6)



第3図 若尾正成氏による編年図 (一部抽出の上、部分改変。実測図縮尺：1/6)

虎溪山1号窯式(東山72号窯式併行)頃より登場するとみる。そして、丸石2号窯式以降は碗Cが型式変化する一方で、碗Aが碗Cの影響を受けて碗A'に変容するという変遷観である。さらに若尾氏は輪花碗を一括しており、前川氏のように輪花碗A・Bの交替を想定していない。この若尾分類は、おそらく檜崎修正編年^(注13)を受け継いだのであろう。

一方で、鈴木敏則氏は前川碗B(氏は「碗」字を用いるが、引用部以外は統一)について「他の碗や深碗との差別化が理解できないのが現状」と記し、「概念的に設定された産物としての型式、いわば机上の型式に見えてならない」と批判する^(注14)。これに対して尾野善裕氏は、各地への二次的な伝播による、一種の器種(形式)融合と考えるべきとの再反論もある^(注15)。確かに尾野氏の指摘の通り、いわば先進的に器種を導入した窯と、二次的に受容した窯での差違は想定すべきである。その一方で、窯跡(群)ごとに器種分化を整理することにより器種分別の認識を判定していくことは、復元が困難ながらも重要であろう。

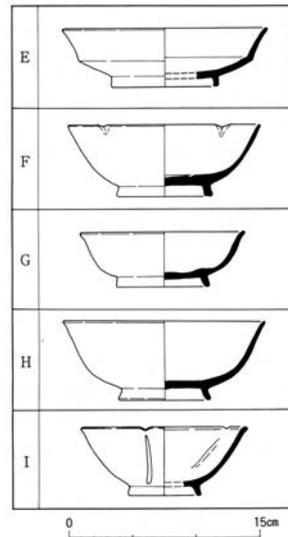
系統を踏まえた型式組列の復元は、細緻になればなるほど考古遺物の分析では一般に困難になるが、後述するモデル論のような歴史復元の上では必要にもなるため、以下ではいままでもあまり議論されてこなかった別の側面も含めて検討してみることにしたい。

4. 灰釉陶器碗皿類の分類に関する再検討

10世紀の猿投窯などにおける従来の分類や編年は、圧倒的に多数を占める灰釉陶器をもとになされてきた。しかし、灰釉陶器窯の中にはごくわずかながらも緑釉陶器(以下では便宜的に未施釉の素地を含める)を焼成した窯があり、より高級品の緑釉陶器との関係性があまり意識的に追究されてこなかったように感じる。しかし、碗皿類の分類を復元する上では、この点が無視できないと考える。

緑釉陶器碗類の分類については、筆者も以前に提示してきたが^(注16)(第4図)、東海窯での出土資料研究ではほとんど取り上げられていない。以下では、緑釉陶器の変遷をふまえて既往の灰釉陶器分類を確認していく(第5図)。

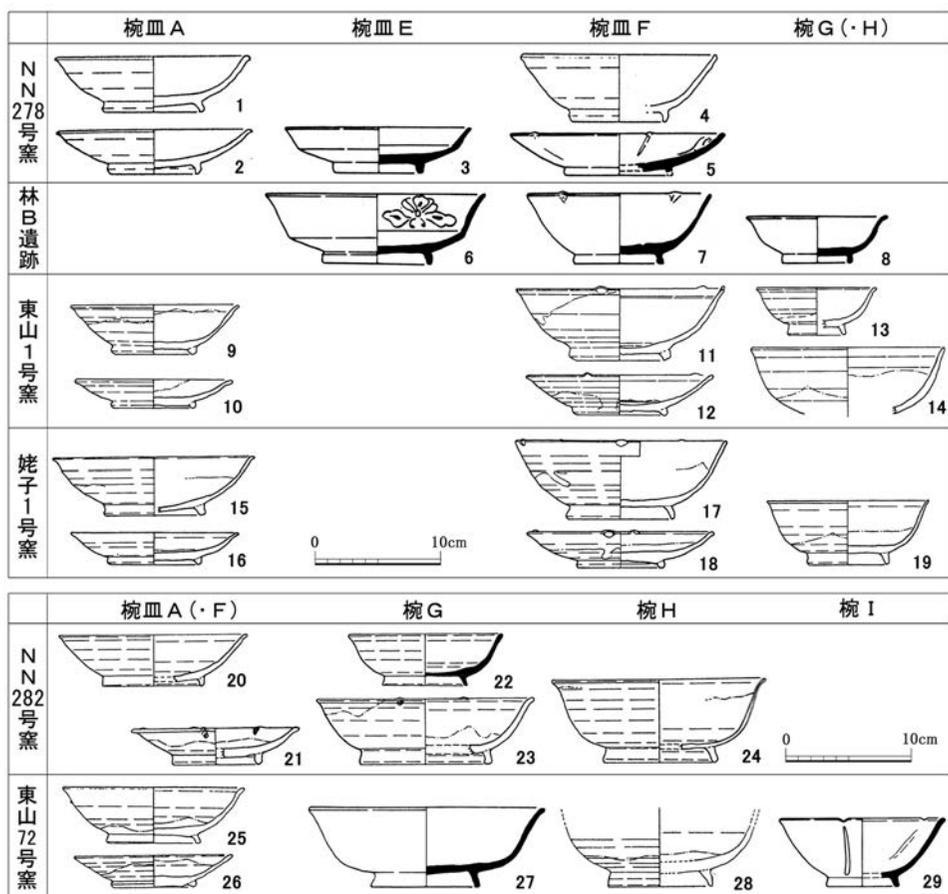
まず黒笹90号窯式の緑釉陶器では、灰釉陶器と共通する碗A以外に、稜碗である碗E、口縁端部押圧の輪花碗である碗Fが出現しており、時代が下がると後二者が緑釉陶器では多数を占めていく。黒笹90号窯式でも最末段階にはN N278号窯などがあるが、出土資料も限られるので、神奈川県平塚市の林B遺跡S I 03出土緑釉陶器をあわせて取り



第4図 緑釉陶器碗類分類図
(注7から抽出、縮尺：1/6)

上げておく。^(注17) S I 03 からは被熱した一括資料が認められ、セットで搬入されたとみられるが、陰刻文様が高比率で施された椀Eと椀Fが主体であり、そこに椀G(8)が少数ながら含まれる。この椀Gは深椀ほどに器高があるわけではなく、しかも小型品である点に特徴があり、若尾椀Bに相当する。灰釉陶器の椀Gは折戸53号窯式の東山1号窯などで確認でき(13ほか)、東濃でも大原2号窯式段階から出現するが、おそらくその直前段階に緑釉陶器で生産されており、灰釉陶器にも採用されたのだろう。灰釉陶器の若尾椀B(椀G)では当初に精製品が多い点も指摘されており、新器種として認定すべきである。

次に、NN282号窯を取り上げる。『愛知県史』では折戸53号窯式の前段階とし、10世紀初めとするのに対し、『新修名古屋市史』では10世紀第2四半期頃の操業とされ、多少とも評価は揺れている。もともと折戸53号窯式に続く標識窯とされ、後に東山72号窯に替え



第5図 9世紀末から10世紀の緑釉陶器・灰釉陶器椀皿類の主な器形
(縮尺：1/6、断面黒塗り：緑釉陶器(素地)、断面白抜き：灰釉陶器)

られた経緯もあり、おおむね折戸53号窯式とみなしておく。ここには、口径に比して器高の高いもの(24)も含まれ、深椀(筆者分類の椀H)と位置付けられる。椀Hのほか、器高に比して口径がやや大きめだが、腰の張りのある椀G(若尾椀B、22・23)や腰の張りのない椀A(20)も認められる。このような様相は、美濃の若尾分類(元の檜崎分類)が穏当であることを示している。また、口縁端部を押圧する輪花の椀皿も少なくなく、その形状は椀皿のF類というよりも椀Gや皿Aなどに当たるため、緑釉陶器でみられた器形との対応が崩れ、各種の器形で輪花が採用されていく変容現象を示している。

続いて、標識窯の東山72号窯をみていく。『愛知県史』では折戸53号窯式と新しい時期のものが混在する移行期で、10世紀後半から11世紀初めとされ、『新修名古屋市史』でも猿投窯では数少ない10世紀後半の資料と評価されている。当窯の近年の発掘調査での検討では、折戸53号窯式に近く、広久手C3号窯より古い様相と位置付けられている。^(注18)

この窯の緑釉陶器素地には、椀G(27、齊藤孝正氏の深椀A)^(注19)が存在する一方で、新たな器形として体部に長く押圧する輪花を施した椀(29、筆者分類の椀I、齊藤氏は椀Bとする)が出現する。後者は体部の張りが小さく開き気味であることなど、灰釉陶器の前川椀Bの系統の祖型とみなされる。ただし、資料数が少ないことも考慮すべきだが、灰釉陶器では椀Aと深椀(28、齊藤氏は深椀Bとする)のみで、前川椀Bはいまだ確認ができない。なお、灰釉陶器の深椀(28)は丁寧な整形であり、新器種としてみなすにふさわしい。

猿投窯を中心にみてきたが、この時期の窯は東濃や瀬戸のほうが豊富な資料を有しており、より細かく実態を追うこともできる。ただ、紙数の制約もあるので、ここでは逐一の説明を避けるが、おおむね以上の変遷と追隨する状況である点を指摘しておきたい。

改めて椀類の分類を整理すれば、付表のようになる。灰釉陶器の椀の形状は若尾分類椀A・B、前川分類深椀にはほぼ対応して、緑釉陶器にも椀A・G・Hを確認できる。その一方で、若尾氏が一列に並べている灰釉陶器の輪花椀は、緑釉陶器からすると大きくは前川分類と対応させて、椀Fと椀Iに由来する2系統に分けるのが穏当である。基本的に灰釉陶器の器形は緑釉陶器と共通し、出現時期からみても緑釉陶器の成立後あるいはほぼ同時にその新器形が灰釉陶器にも採り入れられたという流れを押さえることができよう。

前川椀Bは、上述の猿投窯では明確ではないが、体部に長く押圧を加える輪花椀の椀I

付表 椀類における分類名の対応関係

緑釉陶器高橋分類 (注8)	椀A	椀F	椀G	椀H	椀I	
灰釉陶器前川分類 (注10)	椀A	輪花椀A	—	深椀	椀B	輪花椀B
灰釉陶器若尾分類 (注11)	椀A	輪花椀	椀B	椀C		輪花椀

とほぼ共通する器形で、本来的には椀Aや深椀とは別の器形として成立したものとするのが適切である。おそらく緑釉陶器の輪花椀Iが変容して灰釉陶器の前川椀Bが成立する過程を想定できよう。そのため、椀Iが前川椀Bとなる際に、椀Fの場合と同様に既存の椀Aや深椀との混交も進みやすく、型式的な曖昧さを生むのも自然な流れと評価される。

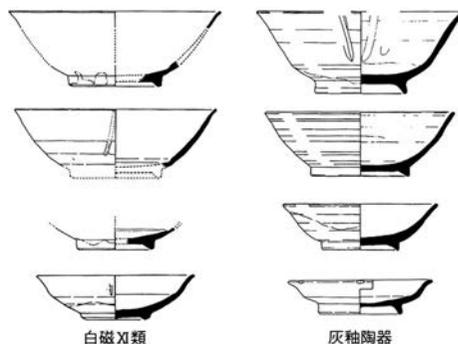
5. 灰釉陶器の模倣対象の再検討

それでは最後に、上記の10世紀における灰釉陶器の器形のモデルの問題にも触れておく。従来の見解では、おおむね中国陶磁の模倣が想定されてきた。しかし、先述のように、直接的には東海産の緑釉陶器に採用された形態をもとに、取捨あるいは変容しつつ灰釉陶器椀皿類の諸器形になったとみたほうが良い。9世紀も、灰釉陶器の椀Aはもともと緑釉陶器と共通する器形である。もちろん、さらに淵源をたどれば、東海産緑釉陶器は中国文物に由来するが、灰釉陶器の直接のモデルには緑釉陶器の存在を無視すべきではない。

その点を押さえたうえで、器形のモデルに関する従来の見解をたどると、いわゆる深椀(椀H・G)の模倣対象に中国の越州窯系青磁の皿類^(注20)を想定することが通説であろう^(注21)。ただ、越磁皿類は金銀器を模倣していることから、厳密には金属器も視野に入れるべきである。とりわけ椀Gの模倣対象は、ともに生産される托や華瓶・香炉などもあわせて密教法具に認められる金属器が直接の模倣対象とみなされる^(注22)。密教法具の椀は六器とも呼ばれる小型のものであり、椀Gに小型品が多い点などの説明もつきやすい。

灰釉陶器の前川椀Bについては、白磁のⅪ類^(注23)を想定する見解(第6図)がある一方で、越州窯系青磁を挙げる見解^(注24)もある。その祖型とみなされる緑釉陶器の椀Iには体部押圧の輪花が特徴的だが、その手法は白磁Ⅺ類にも越磁皿類にも認められる。ただ、金銀器にも同種の輪花は採用されているので、単純にいずれかに限定するのは難しい。緑釉陶器では10世紀に釉調が濃緑色へと変化するが、その要因には、厳密には釉色が異なるとしても青磁釉からの触発を想定すれば理解が容易になる。輪花の手法や体部も含む全体形状などを勘案すれば、椀Iは越磁皿類が緑釉陶器の直接的な模倣対象候補の筆頭であろう。

ひとまず上記のように椀類については判断しておきたいが、特にここで問題にしたいのは当該期の皿類についてである。



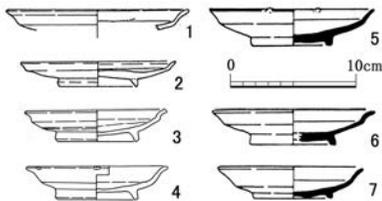
第6図 尾野善裕氏による灰釉陶器とその祖型
(注11尾野論文を一部改変、縮尺：1/6)

先には触れてこなかったが、灰釉陶器では折戸53号窯式段階で新たに折縁皿が出現して、さらに東山72号窯式やその後の時期に稜皿が確認できるようになる。これらのモデルあるいは出現の経緯に関しては、管見ながら稜皿を椀Bと同様に白磁Ⅺ類に求める尾野善裕氏の見解が知られる程度である(第6図)。^(注25)

ただ、稜皿の形態と白磁Ⅺ類において体部に稜を持つ器形では、器高など形態的に隔たりが大きい。あまり指摘がない折縁皿も含めて、越州窯系青磁と比較してみても、体部に稜を持つものはなくはないものの、当該期の器形の中で類似形態をみつけがたい。そもそも椀類では灰釉陶器の直接のモデルは緑釉陶器としたが、灰釉陶器の折縁皿や稜皿は当該期の東海産緑釉陶器では一般的な器形ではない。ということは、灰釉陶器独自の器形となりそうだが、その出現の経緯には他になんらかの説明が可能であろうか。

一つに、黒笹90号窯式の緑釉陶器稜皿(皿E)の系譜を引く可能性がある。ただ、猿投や東濃の緑釉陶器には10世紀代にほとんど皿Eが残らないので、当該期の灰釉陶器での隆盛はやや説明が難しくなる。そうすると別の可能性として、篠窯などの平安京近郊の緑釉陶器の存在も注目すべきではないか(第7図)。この時期の篠窯では9世紀からの系譜を引いて、10世紀前半でも盛んに稜椀や稜皿が作られ、当該期の灰釉製品とも対比できる形状である。東海では後に折縁と呼ばれる独特の形状へと変化するとしても、契機としては不自然ではなからう。しかも、10世紀中頃の篠窯製品では、灰釉陶器の稜皿にみえるように体部中位で屈曲していく。出現時期の先行性や器形的継続性からみても、灰釉陶器よりは高級ながらも量産品であった篠窯などの緑釉陶器が東海地域の灰釉陶器に影響を与えた可能性は十分に成立し得るであろう。その点が、海外製品をモデルにする東海産緑釉陶器では基本的に折縁皿などが採用されていないことの説明にもなるはずである。

これまで平安京近郊窯と東海諸窯とでは、緑釉陶器生産でみる限り、椀類の器形ではか



第7図 灰釉陶器折縁皿(1～3)・稜椀(4)と平安京近郊産緑釉陶器(5～7)

- 1：東山1号窯、2：NN282号窯、
3・4：大針1号窯、5：前山2・3号窯、
6：小塩1号窯、7：西長尾5号窯
(縮尺：1/6)

なり異質性が大きかったため、両者の関係性が問われることがほとんどなかったように思う。しかし、例えば東海の灰釉陶器の皿では、10世紀代に急激に皿類の口径が縮小化していくことが知られているが、同様の縮小化は篠窯など平安京近郊窯でも確認できる。このように、地域を超えた施釉陶器の皿生産の共通の動きを確認でき、影響関係も想定できる。灰釉陶器における新たな皿類の模索として、独自に平安京近郊窯製品にモデルを求めることも不自然ではなからう。そうだとすれば、

先に灰釉陶器の椀類の直接のモデルが緑釉陶器にあったと主張したが、この点は同時期の折縁皿や稜皿とされる新器種についても適用できることになる。

なお、後の百代寺窯式などでは白磁模倣とみられる玉縁口縁の椀が生産されているが^(注26)、これは緑釉陶器生産がおおむね衰退した後であり、玉縁碗の白磁も広く列島内に流通していることから、時代の変容により灰釉陶器が中国製品を直接のモデルとすることに至ったとみなすべきであろう。

以上、かなり駆け足気味の議論となり、細かな論証を必要とする点も多いが、平安期東海産施釉陶器に関する私見の一端を示した。諸賢の御叱正を乞いたい。

(たかはし・てるひこ=当調査研究センター理事、大阪大学文学部教授)

- 注1 斎藤孝正1987「施釉陶器年代論」『論争・学説 日本の考古学』第6巻 歴史時代 雄山閣出版、柴垣勇夫2015「愛知県の古代窯研究史」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県史編さん委員会、ほか。
- 注2 愛知県史編さん委員会2010『愛知県史』（資料編4 考古4 飛鳥～平安）、愛知県史編さん委員会2015『愛知県史』（別編 窯業1 古代 猿投系）
- 注3 新修名古屋市史資料編編集委員会2013『新修名古屋市史』（資料編 考古2）
- 注4 檜崎彰一1976『白瓷』（『日本陶磁全集』6 中央公論社）、ほか。
- 注5 高橋照彦1997「[瓷器][茶椀][葉椀][様器]考—文献にみえる平安時代の食器名を巡って—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、ほか。
- 注6 斎藤孝正1984「考察」『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会
- 注7 高橋照彦1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 注8 長岡京市埋蔵文化財センター2012「長岡京跡右京台246次調査(7 ANJSH-1地区)～井戸・土坑 出土資料～」『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』(一)
- 注9 檜崎彰一・井上喜久男・篠原英政1992『猿投窯—黒笹7号窯跡発掘調査報告書』東郷町教育委員会
- 注10 本稿では詳細に触れることは避けるが、灰釉陶器の成立過程に関して近年では森まどか氏などが綿密な検討を試みている。型式分類の是非や原始灰釉陶器の定義、文献史料の評価など、議論すべきところも残されるが、このような全面的な再検討が新たな視界を広げることになるであろう。森まどか2017「古代灰釉陶器研究Ⅰ—猿投窯Ⅳ・Ⅴ期編年の再検討—」『文研会紀要』第28号 愛知学院大学大学院文学研究科文研会、森まどか2018「古代灰釉陶器研究Ⅱ—猿投窯Ⅳ・Ⅴ期の窯道具について—」『文研会紀要』第29号 愛知学院大学大学院文学研究科文研会、大西遼・尾崎綾亮・片桐妃奈子・河野あすか・中川 永・森まどか2018・2019「灰釉陶器出現前後の猿投窯1・2」『三河考古』第28・29号 三河考古刊行会、大西遼・片桐妃奈子・河野あすか・中川永・森まどか2020「灰釉陶器出現前後の猿投窯3」『三河考古』第30号 三河考古刊行会、ほか。

- 注11 藤澤良祐1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館(後に、2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院に所収)、檜崎彰一1984「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」『東洋陶磁』第10・11号、前川要1984「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相－瀬戸市百大寺窯出土遺物を中心として－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館、齊藤孝正1992「猿投窯における中国陶磁の模倣とその限界」『貿易陶磁研究』No.12、齊藤孝正2000「猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」『日本の美術』第409号<越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器> 至文堂、尾野善裕2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会、ほか。
- 注12 若尾正成1987「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報』第1号 美濃古窯研究会
- 注13 前掲注11檜崎論文。
- 注14 鈴木敏則2014「遠江における灰釉陶器編年の現状と課題」『灰釉陶器を考える－編年の現状と課題－』東海土器研究会。同種の見解は、鈴木敏則2015「宮口・清ヶ谷窯の灰釉陶器編年と地域性」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』東海土器研究会にも示される。
- 注15 尾野善裕2015「灰釉陶器生産地域の拡大～猿投窯からみた駿遠地域の窯～」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』東海土器研究会
- 注16 前掲注7高橋論文、ほか。
- 注17 平塚市教育委員会1988『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』1
- 注18 片桐妃奈子2017「考察」『東山72号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
- 注19 斎藤孝正1987「猿投窯東山地区における灰釉陶器の様相－東山72号窯出土遺物を中心として－」『名古屋大学総合研究資料館報告』No.3
- 注20 太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』(太宰府市の文化財第49集)、ほか。
- 注21 前掲注11前川論文、同齊藤1992論文、ほか。
- 注22 高橋照彦1994「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集
- 注23 尾野善裕1990「白磁V類碗模倣の「山茶碗」とその周辺」『考古学フォーラム』1 愛知考古学談話会、前掲注11尾野論文、ほか。
- 注24 森隆1991「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌』第76巻第4号、森隆1992「平安時代の磁器型窯業生産」『貿易陶磁研究』No.12
- 注25 前掲注11尾野論文、ほか。
- 注26 前掲注11前川論文、柴垣勇夫1994「古代・中世の猿投窯にみる中国陶磁の模倣」『愛知県陶磁資料館研究紀要』13、山内伸浩2005「灰釉末期の玉縁碗(皿)について」『喜多町5号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会、ほか。